出品作品リスト

・都合により展示作品を変更する場合があります。
・出品作品はすべて福岡市美術館の収蔵作品及び寄託作品です。
・番号は展示順と異なることがあります。

No	作品名	作者名	品質	時代世紀	法量(cm)	コレクション
1	仙厓和尚像	山崎朝雲(1867–1954)	木造彩色	昭和10年(1935)	像高30.2	九州大学文学部蔵
2	仙厓和尚図	齋藤秋圃(1769–1861)画、仙厓義梵(1750–1837)賛	絹本着色	江戸時代　19世紀	縦62.8　横20.6	博多百年蔵コレクション
3	円相図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦31.3　横51.3	小西コレクション
4	内典外典書籍目録貼交屏風(2曲1双のうち1隻)	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨書	江戸時代 18–19世紀	縦153.3　横150.6	石村コレクション
5	三聖嘗酸図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦103.6　横28.4	九州大学文学部蔵
6	五徳図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦95.8　横28.2	小西コレクション
7	大通和尚宛書簡草稿	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨書	江戸時代　19世紀	縦23.5　横31.8	石村コレクション
8	三徳宝図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本木版	江戸時代 文政13年(1830)	縦68.1　横27.0	三宅コレクション
9	観音菩薩図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代 文化11年(1814)	縦84.5　横20.0	九州大学文学部蔵
10	行基大士図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦94.4　横39.3	石村コレクション
11	いろは弁図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代 文政2年(1819)	縦100.4　横28.1	小西コレクション
12	尾上心七早替り図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦30.2　横55.2	
13	無法の竹図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦141.7　横111.7	三宅コレクション
14	猿図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦45.0　横54.6	石村コレクション
15	猪図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦32.1　横56.2	小西コレクション
16	犬図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦25.7　横35.8	石村コレクション
17	双狗図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦31.2　横52.4	小西コレクション
18	猫に紙袋図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦37.6　横54.0	石村コレクション
19	凧あげ図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦39.5　横26.9	石村コレクション
20	指月布袋図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦85.7　横27.3	石村コレクション
21	観世音菩薩図	仙厓義梵(1750–1837)	絹本墨画	江戸時代　19世紀	縦51.5　横15.9	石村コレクション
22	釈迦三尊図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦66.6　横23.7	石村コレクション
23	寿老人図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦87.9　横27.2	石村コレクション
24	栄西禅師図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代 文政13年(1830)	縦50.1　横16.9	石村コレクション
25	子孫繁昌図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦123.8　横49.3	石村コレクション
26	農耕図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦119.3　横49.2	石村コレクション
27	花見図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦32.6　横52.9	小西コレクション
28	蜆子和尚図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代 文政3年(1820)	縦119.8　横42.5	三宅コレクション
29	文殊師利菩薩図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦55.9　横31.0	石村コレクション
30	十六羅漢図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦71.5　横31.0	博多百年蔵コレクション
31	すす玉名人図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦80.2　横31.8	小西コレクション
32	托鉢図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦39.8　横50.0	
33	老人六歌仙図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦35.0　横55.0	博多百年蔵コレクション
34	博多図並賛	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦98.9　横58.0	東光院仏教美術資料
35	南泉斬猫図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦67.4　横28.8	石村コレクション
36	円相図	仙厓義梵(1750–1837)	紙本墨画	江戸時代　19世紀	縦37.0　横49.0	石村コレクション

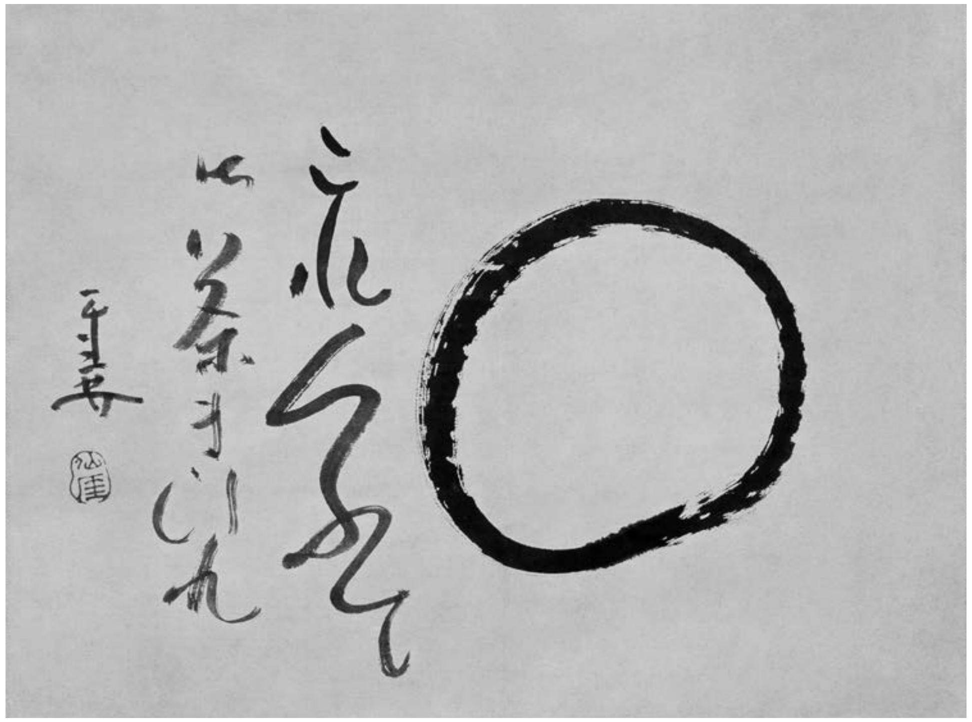
福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051　福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051（代表）　FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

仙厓展

会期　2025年8月26日｜火｜-10月19日｜日｜

会場　古美術企画展示室



出品No.36　仙厓義梵《円相図》

　親しみやすい書画を通して禅の思想を伝えた仙厓義梵（1750～1837）は、人々から「博多の仙厓さん」と呼ばれて慕われました。本展では、作品に込められた仙厓さんの思想について探ってみます。

（学芸課　宮田太樹）

日本最初の禅寺、博多・聖福寺の住職を務めた仙厓義梵**（作品1、2）**（1750～1837、以下、皆さまに親しまれている「仙厓さん」と記載します）は親しみやすい書画が有名ですが、様々な書物を読み厳しい修行に励んだ徳の高い禅僧であったことも忘れてはなりません。

心が癒される愛らしい動物を描いた作品や思わず頬を緩めてしまうようなユーモアあふれる作品などは、深く難解な禅の思想とはなかなか結び付きづらいかもしれません。まずは、仙厓さんがどのような思想の持主であったのかを振り返ったのち、彼の作品の中でその思想がどのように反映されているのかを見てみることにしましょう。

まず紹介するのは**《円相図》（作品3）**です。本作には「百堂」という署名が記されることから、仙厓さんが聖福寺住職を務めた50代から60代前半にかけて制作されたと分かります。円相は自身の悟りの境地を示す主題として禅僧が好んで描いたものです。本作には円相に加え、その隣に仙厓さんによる賛（コメント）も記されます。内容を要約すると、仏教や儒教、老荘思想や神道といった様々な教えを包摂するのがこの円相であり、それぞれの教えの違いは、円相の中の模様の違いに過ぎない。違いをことさらに強調するのは意味のないことであり、あらゆるものを分別しない心のありようこそが肝要である、と仙厓さんは言います。

仙厓さんが禅宗に限らず様々な教えを吸収しようとしていたことは、彼の蔵書目録である**《内典外典書籍目録貼交屏風》（作品4）**に、仏教関係の経論書はもちろん、儒教や老荘思想に関する書物も含まれていることからもうかがうことができます。

ここで、仙厓さんの著作を通して彼の思想をもう少し深掘りしてみましょう。『點眼薬』（参考文献にあげている中山喜一朗編『福岡市美術館叢書2　仙厓―その生涯と芸術』に収録されています）は文化14年（1817）、仙厓さんが68歳の時に著したもので、點と眼という二人の人物によるQ＆A形式で仙厓さんの禅思想が語られます。仙厓さんは本書において、言葉によって悟りへ至る顕教、内なる体験によって悟りが得られるとする密教を包摂するものとして禅宗を位置づけており、あらゆる教えを統合していこうとする仙厓さんの思想が示されています。

この考えは他の作品からもうかがうことができます。**《三聖嘗酸図》（作品5）**は、仏教の祖である釈迦と儒教の祖である孔子、そして、道教の祖である老子の三人が酢を嘗めて酸っぱい顔をした様子を描いたもので、教えは違っても目指すところは同じという「三教一致」の思想を説いています。**《五徳図》（作品6）**も、悟りを得た仏と迷いの世界にある衆生は、どちらも人びとの心が造り出しているという点において同一であると説いており、あらゆるものを分別しない心のありようを重視する仙厓さんの思想をよく表す作品といえます。

そして、仙厓さんにとって、目指すべき心のありようを象徴するのが**作品3**でも描かれていた「〇」だったのです。このことは、仙厓さんが本山妙心寺に宛てた書簡**（作品7）**からもうかがうことができます。この書簡では、「私は自身の心を円くすることができなければ、この身をなくしても修行を止めることはない」「私はまだ心を円くすることができておらず、三角のままである」（いずれも意訳）などと述べられており、仙厓さんの修行に対する決意とともに「〇」こそが目指すべき境地である旨が記されます。

それから、**《三徳宝図》（作品8）**も仙厓さんの思想を示す大切な作品です。本作は、神道、儒教、仏教の順に図解を交えつつそれぞれの教えの要点をまとめたもので、様々な教えの統合を目指す仙厓さんの思想をよく示すものです。紙幅の都合もあり、その全てを説明することはできませんので、「〇」の図形に絞って見ていきます。本作で「〇」が登場するのは、下段の仏教について解説する箇所で、六大（宇宙を構成する六つの要素）のうち、識（事物を認識する力）と対応する図形であり、禅における「即心是仏」（心がそのまま仏である）を示すと言います。やはり、「〇」が仙厓さんにとって重要な図形であったことが分かります。

ここまで仙厓さんの思想を見てきたわけですが、実はこのような仙厓さんの思想が彼独自のものか、と言われると必ずしもそうではないでしょう。心のありようを重視するのは禅宗では極めて一般的なことであり、様々な教えの統合を目指すのも、当時の宗教者としてはそれほど珍しいことではないように思います。

やはり、問題とされるべきは、仙厓さんは自身の思想をどのように書画に託したのか、言い換えると、親しみやすい作品の数々にはどのような思想が込められているのか、ということでしょう。

その手がかりとなるのが、**《観音菩薩図》（作品9）**です。のびやかな筆遣いで明るい表情の観音を描く点に特徴があります。上部には長大な賛が記されていて、他人の利益のために起こすならば、喜怒哀楽の感情はすべて観音菩薩の慈悲の心となるといい、利他の精神に支えられた心の大切さを説いています。

本作が描かれたのは文化11年（1814）のこと。文化8年（1811）、62歳で聖福寺の住職を隠退し、翌9年に虚白院（現・幻住庵敷地内）に移住して書画三昧の生活を始めて間もない時期のことでした。

この頃から仙厓さんの画風は明るくのびやかなものに変化していきますが、その原動力となったのが「利他」すなわち、自身の修養や弟子の教化などでなく、博多で暮らす人びとの利益とすることを目指す精神だったのです。

先ほど触れた『點眼薬』など自身の思想をまとめた著作を書くのもこの頃であることを考え合わせると、住職隠退後間もない時期の仙厓さんは、自らが修行の末に体得した禅の精神を人びとに伝えることに意欲を燃やしていたのではないかと思います。

もっとも、この時期の仙厓さんの試みが100％成功しているか、と言われると必ずしもそうではないように思います。というのも、**作品9**に描かれた観音の姿は確かに親しみやすく、賛にも思いが溢れているのですが、いかんせん長文すぎるので画とのバランスを崩していますし、内容をぱっと理解することもできません。

実は仙厓さんが聖福寺の住職を隠退して間もない、60代後半頃に手がけた作品には、画は親しみやすいのだけど、賛がやたらと長いというものが少なくありません**（作品9～12）**。

とりわけ、**《尾上心七早替り図》（作品12）**は、役者の早替り芸をユーモラスに描いた作品ですが、長大な賛に込められた意味（仏教の世界で説かれる六道世界は、役者の早替り芸のように移ろいやすいけれど、すべては心が生み出すものであるから、心の持ちようこそが肝要である）まで読み込むことは困難です。自身の思想を言葉を尽くして伝えようするあまり、かえって作品の魅力を削いでしまっていると言えるかもしれません。

おそらく、仙厓さん自身もこうした課題を自覚していたはずで、70代以降、さらに作風を変化させていきました。その中で、画風は親しみやすさを増していき、それに伴って賛も短くなっていきました。そして、73歳の時に描いた《寒山拾得・豊干禅師図屏風》（幻住庵蔵）において「厓画無法」（仙厓の画には法が無い）を宣言するに至ります。

無法とはルールに縛られない、という意味でしょうが、無法の画を通して仙厓さんが目指したのが笑いでした。それを示すのが、**《無法の竹図》（作品13）**で、本作の賛において仙厓さんは自身の画には法が無いとした上で、画を見ることで人がみな笑い、自分自身も大笑いする（人皆咲（笑）焉、厓亦大咲（笑）乃）と述べています。

この無法と笑いこそが、仙厓さんの作品のキーワードであり、ルール無用の画で自身も見た人も笑ってしまうというのが、仙厓さんがたどり着いた答えだったのです。

すなわち、多様な考えを包摂する心の実現を目指した仙厓さんでしたが、これを言葉によって伝えることには限界がありました。そうではなく、同じ画を見て笑うことを通して人びとが思いを共有する、こうした体験の積み重ねが、やがては多様性を受け容れる心を養うのだと仙厓さんは考えたのではないかと思います。

ところで、改めて**《無法の竹図》（作品13）**に戻ると、主題の竹は伝統的な手法で描かれていて、無法でもなければ笑いを誘う要素もないように思えます。仙厓さんはこの作品でどうやって笑いをとったのか？その答えはわかりませんが、賛によれば本作は酒にまかせて描かれたものだそうです。酒席でのパフォーマンス的な作画だとすると、笑いをとる手段は色々と想像できるかもしれません。

このように作品だけでは笑いどころがわからないタイプのものもありますが、それはごく少数。70代以降の仙厓さんの作品はどれも見ただけで笑ってしまうものばかりです。

試みにいくつか分類してみると、愛らしい動物や童子を描いた「ゆるかわ系」**（作品14～19）**、穏やかな笑みをたたえた神仏や人びとの日常の一コマをとりあげた「ほっこり系」**（作品20～27）**、対象をマンガのキャラクターのようにデフォルメしたり極端にパロディー化する「誇張系」**（作品28～31）**、ユーモアを交えた皮肉を浴びせる「毒舌系」**（作品32～36）**などでしょうか。

仙厓さんの多彩なテクニックによって繰り出される笑いは現代の私たちにも非常に魅力的に映ります。仙厓さんが書画を通して目指した思いの共有は、確かに実現されたと言えるでしょう。

主要参考文献

※ここにあげた図録、書籍は、2階の美術情報コーナーで閲覧することができます。

- 福岡市美術館・中山喜一朗編『仙厓展　ユーモアに包まれた禅のこころ』昭和61年
- 中山喜一朗編『福岡市美術館叢書2　仙厓―その生涯と芸術』福岡市美術館協会、平成4年
- 福岡市博物館編『栄西禅師八百年大遠忌記念特別展　日本最初の禅寺　博多　聖福寺』平成25年
- 出光美術館編『開館五〇周年記念　大仙厓展―禅の心、ここに集う』平成28年